

ルターと初期新高ドイツ語

河 崎 靖

ルターがドイツ語の発達のために尽くした努力は十分に評価されるべきである。ただ、かつて言われたように初期新高ドイツ語の創始者という意味合いではなく、東中部ドイツ語の書記伝統の定着に向けた活動を通し言葉の手本ともいべきものを仕上げていったという点においてである。ルターの新約聖書訳は 1522 年のことで、これは画期的な大成功をおさめ、低地ドイツ語訳・オランダ語訳・デンマーク語訳・スウェーデン語訳まで現われるほどであった。引き続き 1523-24 年には旧約聖書訳がヴィッテンベルクで出版された。ルター訳聖書が出た後は、それ以前に出版されていた聖書訳はもはや出なくなっていた。さらには、カトリック側のいわばライバルたち（例：Emser 1527 年訳）がルターの聖書訳を真似てただし意図的に細部が違うようにして出版するに至った¹。

ルター訳（新約聖書「第一コリント」13, 9-12）

9 Denn vnser wissen ist stuckwerk. / vnd vnser Weissagen ist stuckwerck.
10 Wenn aber komen wird das volkomene / so wird das stuckwerck
auffhoren. 11 Da ich ein Kind war / da redet ich wie ein kind / vnd war klug
wie ein kind / vnd hatte kindische anschlege. Da ich aber ein Man ward /
that ich abe was kindisch war. 12 Wir sehen jtz durch einen Spiegel in
einem tunceln wort / Denn aber von angesicht zu angesichte.

エムザー訳（新訳聖書「第一コリント」13, 9-12）

9 Den unser wissen ist stückwerck. / vnd unser weyßsagen ist stückwerck. 10 Wen aber kommen wirt das volkomene / so wirt das stückwerck auffhören. 11 Do ich ein kindt war / do redet ich wie ein kind / und war klug wie ein kind / vnd hatte kindische anschlege. Do ich aber eyynn man wardt / leget ich ab was kindisch war. 12 Wir sehen itzt durch eyn spiegel inn dunckel, den aber von angesicht tzu angesicht.

というのは、私たちの知っているところは一部分であり、預言すること
も一部分だからです。私が子どもであった時には、子どもとして話し、
子どもとして考え、子どもとして論じましたが、大人になった時には、
子どものことをやめました。今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見て
いますが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。

このヒエロニムス・エムザー（Hieronymus Emser, 1438-1527）に対するルター
の態度は辛辣を極める。ルターのことばを『卓上語録』から引用すれば、
「今になって初めてエムザーの新訳聖書で知ったのだが、彼がこんなにも悪
意があるとは思ってもみなかった。彼はこの新約聖書を書くより以上にうま
い手を心得ていた。というのは彼の新約聖書を見ると、彼は「……」わたし
たちの翻訳を巧みに利用し、良心の命にそむいて所々言葉を変えて、不必要
な饒舌を加えているからである」（1531年8月）。あるいは「わたしの翻訳
を利用して、死ぬまで、わたしの翻訳を攻撃したエムザーやその一派」と同
年（1531年）、別の箇所述べている²。

ルターは生きている間中ずっと聖書訳出の仕事に関わり続け、彼のいろい
ろな聖書の版を見比べてみるとわかるように、訳語の一つ一つにこだわりを
もって取り組んだ足跡が見て取れる。

旧約聖書「創世記」(1, 4)

1523 年版：vnd Gott sahe das liecht fur gut an /

1534 年版：Vnd Gott sahe, das das Liecht gut war /

「神は光を見て良しとされた」

旧約聖書「創世記」(3, 6)

1523 年版：das der bawm feyn war, dauon zu essen /

1534 年版：das von dem Bawm gut zu essen were /

「その木はいかにもおいしそうだった」

旧約聖書「創世記」(40, 7)

1523 年版：warumb sehet yhr heutte so ubel /

1534 年版：warumb seid jr heute so traurig /

「今日はどうしてそんなに憂鬱な顔をしているのか」

新約聖書「マルコ伝」(14, 33)

1522 年版：Vnd fieng an zu ertzittern vnd zu engsten /

1530 年版：Vnd fieng an zu zittern vnd zu zagen /

「(イエスは) 深く恐れもだえ始めた」

確かに宗教改革に先んじる時代から多くの聖書翻訳が出されてはいた³。しかしながら、聖典を正式の順序で翻訳した全訳聖書が出版されたというケースはごく僅かであった⁴。というのも、聖書翻訳というのは中世においては特別な事柄であったからである。つまり、聖書を民衆のことばに訳するということは完全に禁止されているというわけではなかったけれども、司教達はかなり慎重な態度をとっていた。なぜなら異端視されることへの不安はとて

も大きかったからで、例えば先のエムザーが1523年に「どのような根拠でルターが新約聖書の翻訳を行ったかはともかく一般の人には禁止されていた」という文面でルターへの批判を行っているほどである。その言葉に対してもルターの熱意は優る⁵。翻訳に当たってまずルターはドイツ語を3つの伝統的な聖なる言語（ヘブライ語・ギリシア語・ラテン語）と同等とみなした。ラテン語は教皇の言語であり、それゆえルターはドイツ語に同等の高い威厳を認めていたことになる。「私たちは言語なくしては福音を聞くことはできない。言語は精神が宿る場所である。言語という器によって精神が運ばれる。[……] もし私たちがことばにかかわらないようにするとすると、ただ福音を失うばかりか、最後にはラテン語もドイツ語も正しく読み書きができなくなる」（「ドイツの全市の市参事会員宛：キリスト教精神の学校の設立・運営」1524年）。1500年当時、300人に1人の割合でドイツ語訳聖書（印刷本）が出回っていた計算になり、1546年にはルター訳聖書がドイツ人13人に1人の比率で所有されていたと推定される。もっとも、カトリック教会はルターが書いたものを読むことを禁止していたのではあるが⁶。

「聖書は誰にとっても理解できるものでなければならない」、このモットーのためにルターが繰り返し強調したのは、自分が聖書の読者に受け入れられ、また理解されようということであった。ルターにとっては、これしかないというような正典化されたドイツ語聖書の形態は存在しなかった。このことは生涯にわたる彼の翻訳作業の態度が示しているところである。併せてルターは、翻訳家・作家としてだけでなく、教会の礼拝での説教者としての立場もあったわけである。ルターの信念は、翻訳者としても釈義者としても明晰であり続けることである。これは、話し言葉と書き言葉をはっきり使い分けるということである。事実、ルターが説教をする時には、印刷された翻訳聖書とは異なった文体を用いていた。礼拝ではルターは、聖書からの引用を身振り手振りを交え表現力豊かに、また説教の内容に注釈を加えつつテキス

トの中身について濃淡の加減をつけたりしていた。こうした姿勢の実践例は、次の対応箇所を見比べることによってもいくらか実感できる’。

話し言葉の例：説教（1523 年） 書き言葉の例：翻訳（1522 年）

マタイ 5:8	Selig seind die, die eins rainen hertzen seind.	Selig sind die vorn hertzen reyn sind.
------------	--	---

「心の清い人々は幸いだ」

マタイ 5:25	Sey wilfertig dem der dich belaydigt hat.	Sey willfertig deynem widersacher.
-------------	--	---------------------------------------

「あなたを訴える人と仲直りしなさい」

マタイ 19:29	Wer da wirdt verlassen sein hauß ... der solß ob hundert feltig nemen und sol das ewig leben dort haben.	Vnd eyn iglicher, der da verlest, heuser ... , der wirts hundertfeltig nemen, vnnd das ewige leben ererben.
--------------	---	--

「家 [……] を捨てた人は皆、その百倍もの報いを受け、永遠の生命を受け継ぐ」

マタイ 27:40	... do er am creütz hieng ... : “Ey wie einen feinen got hat er, ist er gottes sun, so steyg er herab.”	Bistu gottis son, so steyg er ab vom creutz.
--------------	--	---

「もし神の子なら [……] 十字架から降りて来い」

このように、ルターは話したり説いたりする時と書き物をする時とは違った

スタンスをとっている。彼は『ヨブ記』(1524)の序で次のように宣言している：「正しい用法であり明瞭かつ誰もがわかる言葉を用いる努力をした。私よりもうまくこの仕事をできる人がいたら知りたい」。さらにこれに続いて次のような神学的なコメントを記している：「すべてのキリスト教信者の間に差はない。靴屋も鍛冶屋も農民も手工業者も皆、同じように神聖な司祭であり司教である」。こんな具合に、ルターの文体はあくまで受け手に応じたものになっている。ルター自身にとっても「何かを生きた話し言葉で説明するのと、死せる書き言葉で解説するのとでは大きな違いがあった」ということである。そして、まさにこの点にこそルターの成功の要因があったと言えることができる⁸。

周知の通り、ルターは新約聖書をギリシア語原典から、旧約聖書をヘブライ語原典から訳出した⁹。ルター訳聖書はことばの質が高かったがゆえに、ドイツ語標準語としての規範的なはたらきを担うようになっていく。さらに後の時代(16世紀～)の翻訳者たちがルターの文体に依存することにより、ますますルターの文体が広められることになった。この事実にはルターも気付いていて、「私は自分の弟子にも併せて対立する人々にも語ることを教えられて嬉しく思う」と述べている。宗教改革の時代の言語神学にとって、ルターのドイツ語聖書は極めて顕著な影響を与えたできごとであった。ルターはプロテスタントの立場から聖書を総合的に理解しようとする立場に貫かれている。そして、聖書の内容をわかりやすく、そして力強くドイツ語で言い表わそうとしている¹⁰。

14世紀終わり頃、羊皮紙に記録を残していた時代が過ぎ、通信の媒体として安価な紙が出回るようになると、いわば大量生産が可能になり写本の数も急増した¹¹。こうして確かに写本は一般市民にも手が届く範囲となりはしたが、それでも1人の書き手が聖書を写本に書き写すとなると最低2年がかかった。その後、約半世紀して(1440年)印刷術の発明があり(ゲーテ

ンベルク J. Gutenberg による、マインツにて)、技術改良も加わり本の値段が下がり、印刷部数が一気に増加した。1500 年時点でヨーロッパ全体で 1,100 を越える印刷所があり、その時点までにチラシ類から大型本まで大小合わせて 11,000,000 もの印刷物が刷られていたとされている。ただ、ドイツで印刷された最初の書籍はラテン語のテキストで、初期新高ドイツ語の時代全般を通してドイツ語テキストよりも数の上で優っていた。1500 年までに印刷に付されたドイツ語の書籍というのは約 80 点あったが、ただし、いずれの書物も極めて方言色の強いものと言わざるを得ない。16 世紀には販路の拡充が図られるようになったが、これは言葉の面で言えば、ある本が他の方言域でも読者を獲得するためにはどういう手順・作業が必要かを検討する契機ともなった。具体的には、方言を感じさせる音・語形に手を加えさらに文レベルの修正をも施すのである。この際、依拠することになったのは、政治的にも勢力の強かった官庁語 Kanzleisprache であった。こうした状況から、諸都市（アウグスブルク・ウィーン・ニュルンベルク・ヴィッテンベルク・フランクフルト・シュトラースブルク・バーセルなど）には印刷言葉なるものが生まれ、徐々にではあるが、より統一的な語形・正書法に向かって進むのを押し進める原動力になっていった。これほどまでにやはり印刷された書き言葉の影響は大きく、書物の普及が進むと同時にその果たす役割は計りしれないものがあったのである。当時、決して規範的な文法があり top down に模範を示したわけではなく、また政治的な何かしらの機関が影響力をもっていたのでもない。16 世紀の終わりにもなると印刷業者たちは次第に東中部ドイツ語 Ostmitteldeutsch（さまざまな方言域からの人々が集い、その結果、ことばの平準化が進み、比較的統一性のある交易語が形成された地域のことば）などの言語慣用に倣うような状況になっていた¹²。

1500 年前後にはドイツ語圏に、官庁・印刷業者らによって推し進められ、ドイツ語書き言葉の原型たるものが芽生え始めていた。この時代まだなお将

来のドイツ語標準語へとつながっていく超地域語的候補がいくつか併存している状況であった。それらはお互い次のような点で異なった様相を示している：1) 音レベル：新しい二重母音のあり方 (dütsch タイプと *teutsch* タイプ)、2) 正書法レベル：語末音消失 Apokope の形態 (Red/Rede のように語末音 e がある型とない型が共存)、3) 文法レベル：過去分詞の形態の揺れ (例：sein 動詞の過去分詞として gewesen, gewest, gesein の形が見られる)、4) 異なった語彙の使用 (例：「大きい」の意の *michel/groß*、「～まで」の意の *bis/unz*)、5) 子音推移が高地・低地ドイツ語圏域で浸透の具合が違っていること等である。こうした不統一で均質性のない語形が現われ、未だことばの領域で規範的な力がはたらかない時代であった。

初期新高ドイツ語期の初めの頃は確かにラテン語を範とする文体が散見される (例：„Der Ackermann aus Böhmen“ 1401 年)。ただ、この人文主義・ルネサンス期、ラテン語の地位が揺るぎないものになっていく一方、ドイツ語圏の人々が自らの母語に対する洞察を本格的に始める時期とも重なる。例えば翻訳を行う際に、同義語または新造語で語彙体系を豊かにしたり、文構造を新しくしたりする試みがなされた。いくつかの羅独辞典が編まれたのもこの時期であるし、1573-78 年には (ラテン語で書かれているとは言え数種の) ドイツ語文法書が執筆された (J. Clajus 1578 など)。ヨーロッパの他国と同様、人文主義はドイツでも自らの根源 (併せて自らの言語の歴史) に対する関心を呼び起こす。17 世紀初めともなると母語への関心はさらに高まり、イタリアを見本に言語の規範化 (あるいは言語の純化) を目指す言語協会が設立されるにまで至ることになった。

人文主義者はラテン語のできない人たちに古代の文化を伝えようと数多くの作品をラテン語・イタリア語・ギリシア語からドイツ語に翻訳する仕事をなしたものの、自らものを書く際にはラテン語を使っていた。ラテン語はなお学校で、学問の世界で、また教会で第一位の地位を占め続けていたのであ

る。実際ルターもドイツ語よりもラテン語を使うことの方が多かった。このように、書き言葉としてはドイツ語よりもラテン語が優勢な状況がしばらく続くのであるが、それでも初期新高ドイツ語の時期になると印刷術の影響で散文の作品が徐々に数を増してくる。官庁等も文書類をドイツ語で書くようになり、商用のための書き言葉もドイツ語となった。

書き言葉にしても話し言葉にしても、宗教改革や印刷術を通してドイツ語の用いられる範囲は格段に広がっていくことになる。1570年にはドイツ語圏での印刷物の70%をなおラテン語が占めていたが、1770年には17%まで減少している。ようやく1687年に大学での講義がドイツ語で行われるようになり、18世紀にはドイツ語が大学での授業での言語として次第に普及していった。初等・中等の学校教育でも、例えば算数や論理学などいくつかの科目でドイツ語で書かれた教科書が現われてくるようになる。さまざまな職種（ビジネス・手工業・鉱業・軍事関係など）の専門書がドイツ語で書かれるようになったことは大きい。旅行記・錬金術などの通俗科学的な読み物、医学に関わる書物などもまたドイツ語で書かれるようになってきた。その他では、各個別都市の年代記や歴史小説・聖人伝・説教集などがドイツ語で執筆されるようになる。ドイツ語の書物としては、すでに15世紀末あたりから出版され始めていた民衆本が果たした役割も小さくない。英雄叙事詩『トリスタンとイゾルデ』・『ファウスト』伝説・『ティル・オイレンシュピーゲル』等の笑劇などがこれに当たる¹³。

ドイツ語で書き言葉が発達していくプロセスにあって、どうしてもラテン語に依存したような硬い文体という印象を受けるのは否めない。語彙の領域をはじめ文構造に至るまでラテン語の影響は計り知れない。語順について言えば、ゲルマン語の時代もしくは古高ドイツ語の時代に入っても、かなり自由語順で今日よりもそのルールはゆるやかであった。例えば動詞の後置（副文において動詞を文末におくこと）という規則は確かにドイツ語の最古の文

献にも見出されはするけれども、実際は初期新高ドイツ語期に至ってようやく書き言葉で定着し 18 世紀の文法家によって規範化されたものである。この現象に関してもラテン語の語順がモデルとしてはたらいたと言われることがある。統語論の他の面についてさらに言及するならば、中高ドイツ語期までの文の構造というのは基本的に並列的 (parataktisch) なものであった。つまり、単文と単文を結ぶ形で文をつなげていくやり方である。ここにラテン語の影響が作用し、従属的 (hypotaktisch) な文構造の体系ができあがっていく。副文を構成するには欠かせない従属接続詞が新しく作られる (auf daß, ohne daß, indem など)。こうして、行政・官庁あるいは学問の分野で、抽象度の高い文体が可能となった。ただ、文同士の従属関係を用いて明晰な記述ができる反面、必然的に文は長く複雑なものとはなった (官庁体 Kanzleisprache と呼ばれることもあった)。この他、分詞を使った構文などもラテン語の影響を受けていると考えられる。例えばシラーは „nach genommenem Abschied von seinem Freund“ という構文を用いている (ただし、今日ではこの文構造は使われなくなっている)。あるいは主として書き言葉においてであるが 1600 年以降、冠飾句 (erweitertes Attribut) が定着し始める (例: die hin und wieder im Reich erst-gedachten Commercien)。語順の固定化も進んだ¹⁴。古高ドイツ語期には動詞は通常の平叙文の中で文頭、第二位もしくは文末にしか来ることができなかった。ところが、中高ドイツ語の時代になると、代名詞主語がおかれるようになったこともあって、動詞が文頭に位置することは稀になった。初期新高ドイツ語期には、この文頭位置に埋め草的に es が入れられるようになる。

Es durfft ein Esel nicht viel singen. (Luther)

今日、定動詞は基本的に文の第二の位置を占め、述語成分は文末に現われる。

ただし、ルターの時代には動詞成分の枠構造というのはまだ文法化しているとは言えない。

Er mus dencken an ein vas voll bier. (Luther)

副文で定形が文末におかれるのが次第に優勢になってきており、ルターの文獻に即してその様子を見てとることができる。

Luther (1522 年) : die weyl aber yhr nicht seyt von der welt, ...

Luther (1546 年) : Dieweil jr aber nicht von der welt seid, ...

Luther (1522 年) : das die welt bereyttet ist durch Gottis wort,

Luther (1534 年) : das die welt durch Gottes wort gemacht ist,

ルターの『卓上語録』等を見れば明らかなように、当時、教養層というのはラテン語・ドイツ語の両方ができる人びとのことであった。彼らはお互いらテン語・ドイツ語の混成語のようなことばを用いることがしばしばであった。

Unus Latomus ist der feinst scriptor contra me gewest.

quia Diabolus schlegt ein verbum auff den Kopff.

(ともに、ルター『卓上語録』より)

こうした2言語併用の状態から、ドイツ語の日常的な言語使用の中にたくさんのラテン語の語彙が徐々に取り込まれたのは当然のことであった。

ラテン語は古高ドイツ語の時期以来、絶えずドイツ語の語彙体系に作用し続けてきた。人文主義時代、いわばラテン語の波がドイツ語を襲った。うち

いくつかの語は短命であったけれども、かなり多くのラテン語の語彙がドイツ語に定着したのであった。この現象に併せて、確かに多くはラテン語経由なのではあるが、この時はギリシア語の語彙も借用されることになった¹⁵。諸科学が発展したり新しい職種が誕生したりして必要となってきたさまざまな専門的な用語には新しく外来語が用いられることが多く、それらが次第に日常的に使われる傾向があった。新しく生まれたものの呼称として外来語が使われるいう場合もあるが、古くからあるドイツ語の語彙に代わって用いられるようになった外来語も決して少なくない（例：ラテン語の月名 Juli「七月」、Dezember「十二月」。古くはドイツ語でそれぞれ Heumonat「干し草の月」、Christmonat「キリストの月」と称していた）。ここでいくつかの領域ごとに当時の外来語をまとめておくと次の通りである（*の印が付いている語はギリシア語由来、無印はラテン語からの借用語の意）。

行政：Registratur 登記官, Magistrat 市当局, kopieren 写す,

*Archiv 古文書

法律：Advokat 弁護士, Arrest 拘留, Testament 遺言状

*Polizei 警察

医学：Nerv 神経, Patient 患者, Rezept 処方箋

*Chirurgie 外科, *Epidemie 流行病, *Katarrh カタル

数学：multiplizieren 掛ける, plus 足す, Produkt 積

*Mathematik 数学, *Geometrie 幾何学, *Parallele 平行線,

*Problem 問題, *Zylinder 円柱

文法：Konjugation 屈折, Konsonant 子音

*Grammatik 文法, *Orthographie 正書法

学術：Dissertation 学位論文, immatrikulieren 入学手続きをする

Student 学生, Kommilitone 同級生, Professor 教授

*Akademie アカデミー

学校：Examen 試験, Rektor 学長

*Gymnasium ギムナジウム

印刷：Fraktur 亀の甲文字, Makulatur 刷り損じ, Korrektur 校正,

Format フォーマット

16 世紀以降、ラテン語派生の諸言語からもさまざまな専門語がドイツ語に入った。イタリア語からは例えば商業用語や音楽に関わる語彙などである。軍事用語なども多くロマンス系の言語からドイツ語に借用された（16 世紀に始まり三十年戦争で国境を越えた傭兵制度がとられ勢いが加速された）。

〈イタリア語〉Konto 口座, Kredit 信用貸し, Bilanz 決算, Baß バス（低音）, Allegro アレグロ（速く）, Violine ヴァイオリン,

Fagott ファゴット, Alarm 警報, Kanone 大砲, Soldat 軍人

〈スペイン語〉Armada 艦隊, Infanterie 歩兵, Major 少佐

〈フランス語〉Bombe 爆弾, Brigade 旅団, Offizier 将校

初期新高ドイツ語の終わりくらいから社会の上層に対するフランス語の影響がだんだんと強まってくる。

一方、同じ時期あたりから、たとえ外国語から直訳的な借用の形式をとってでも、ドイツ語に独自の専門語を生み出そうという努力がなされるようになってきた。

Vollmacht 「全権」（＜ラテン語 plenipotentia）, Jahrbücher 「年報」（＜ラテン語 annales）, Viereck 「四角」（＜ラテン語 Quadrat）

初期新高ドイツ語期には、抽象語を作る語尾 -ung を使うなどしてドイツ語に新造語が生まれ始めた。

Verfolgung 「追跡」, Belohnung 「報酬」, Abbildung 「図版」

このような語彙が普及するに当たっては、人文主義者らによって編まれた羅独辞典あるいは類義語辞典、もしくは散文で好まれる、類義語を補足的に使う次のような文体が果たした役割は決して小さくない。

schnell und behend 「素早く手際よく」, achten und schätzen 「見積もり評価する」, gerungen und gestritten 「争い戦って」

ドイツ語独自の発展傾向は、名詞の複数形の領域にも見られる。副音節 (Nebensilbe) が弱化し、語幹ごとの曲用タイプの間に差が弱まった結果、逆に複数形を標示するマーカーが明示的になってきた。すなわち、中高ドイツ語期にすでに、語の後方の音節が -e などのように一律に弱くなって、名詞のグループ間でお互い差異がはっきりしなくなったがために、明確に複数形を示す語形が必要とされることになってきた。

- ・ウムラウトによって複数形が示されることが多くなった (例: Vögel, Klöster)。
- ・以前は稀であった -er 語尾による複数形標示が増えた (例: Wörter, Hörner)。

動詞についても初期新高ドイツ語の時代に新しい発展が見出される。中高ドイツ語期からの変化には次のようなものがある。こうした平準化により、

人称語尾がますます均一化する。

3 人称複数（現在形）：中高ド sie gebent > 初期新高ド sie geben

2 人称単数（過去形）：中高ド du gæbe > 初期新高ド du gabst

（強変化動詞において）

また弱変化動詞に関することと言えば、今日でいう混合変化動詞が成立した。

中高ド setzen - satze - gesazt > 初期新高ド setzen - setzte - gesetzt

中高ド hæren - hôte - gehôrt > 初期新高ド hören - hörte - gehört

初期新高ドイツ語期に、現在形の幹母音と過去形・過去分詞の幹母音が一致するようになった（いくつかの例外も残っている：例 brennen, kennen, rennen など）。さらに、過去形において単数・複数間の幹母音が同一のものになるようになったのも初期新高ドイツ語期である。中高ドイツ語の時代では、強変化動詞で過去形/単数・複数は以下のものであった。

中高ド ich band — wir bunden

中高ド ich reit — wir ritten

たいていの場合、単数形の幹母音が複数形でも使われるようになるが（band → bunden）、逆に複数形の幹母音が単数形で用いられる場合もあった（reit → ritten）。ただ、韻文など文体によっては長い間、どちらの幹母音が現われるか流動的なケースがあったのも事実である（例：過去単数形 wurde に対する ward）。こうした均一化への傾向が初期新高ドイツ語の時代に進んだのは確かなのだが、強変化動詞にしてみるとこれは平準化というにとまらず、

逆に一種の差異化の現象とも言える。と言うのも、もともと7つのタイプに分類されていた強変化動詞は結果、約30ものグループに分けられることになったからである。

初期新高ドイツ語期のドイツ語は書き言葉においても方言の特性が見て取れるほどである（多様な書き言葉方言 Schreibdialekt）。これは正書法に関連する領域の問題であるが、同一文書内である語が違ったふうに書かれるということも稀ではなかった。例えば母音の長短の示し方にも不統一が見られる。

- ・母音を重なる：Moos
- ・h,e,i を長音のマーカ―として挿入する：froh, Soest（地名）, Voigt（人名）¹⁶

特に根拠なく言わば装飾的に子音を重ねるのも、正書法上、揺れが見られる一因となっている（todt, their, köppfen, auff, wortt）。とりわけ破擦音について顕著である（例：letcz[ts]t）。

zc, cz, tcz, czz¹⁷

16-17 世紀のバロック期にはこうした綴り方が流行さえしたのである。

funffczig, wherdenn

初期新高ドイツ語期には、今日のように音の質（母音・子音）に応じてスペリングの規則があったわけではなく（例えば ijf あるいは u/v の区分などに際して）、中高ドイツ語の時代と同じように語の中の位置に基づいていた¹⁸。

語頭：jn(in), jar(Jahr); vm(um), vleiβ(Fleiß)

語中：wil(will), müeien(mühen); mus(muss), zuuor(zuvor)

当時はまだ分綴法・分かち書きに一定のルールがなかった。

sch-rift（どこで区切っても構わなかった）；

zu rissen (zerrissen), zuuerteutschen (zu verdeutschen)

初期新高ドイツ語の特性の中でも特筆すべきは、名詞の大文字書きである。この現象はルターに即して考察しなければならない。ルターの初期の著作においては、ただ宗教的に大切な名詞あるいは社会的に高い地位を示す名詞のみが大書された（例：Gott「神」、das Neue Testament「新約聖書」、Keiser「皇帝」、Fürst「侯爵」など）。ところが、ルター後半生の著作では名詞全体の80%が大文字書きされている。初期新高ドイツ語期に確固たるルールはなかったが、この大文字書きの現象に及ぼしたルターの影響は大である。

このように、ルター自身が目指したわけではなくても、彼の功績はこの時期、統一文章語の成立の決定的な要因となった。ルターが初めて聖書をドイツ語に全訳したことによって、広域にわたり方言によって極めて細分化されていたドイツ語圏に最終的に統一文章語が成立することになるのである。ルターが16世紀の聖書翻訳によって文法学者の規範となったことは驚くことではない。さらにルターの文体は17世紀さらに18世紀に至るまで引き続き言語規範であり続けた。一個人が一国の標準語の成立に限りなく大きい寄与をなしたのである。ルターの時期のドイツ語（初期新高独語）は中世から近代にかけての過渡期の言語形態と言える。スペルの表記法や語形変化にも統一性がなく、同一著者による1テキスト内においてすらいくらかの変異（ヴァリエーション）が見られるほどである。語彙の分野では地域差さらには社会層による揺れが観察される。そもそも中世・近世にドイツ語は1個

別言語として拡張を続けていく時代であった。ルター自身がことばのルールをうち立てたわけではなかった。それでも彼のことが規範的な作用を及ぼしたことは確かである。聖書（1534年から1547年のうちに10万部が印刷された）をはじめとして、賛美歌・教理問答集・説教集（聖書テキストの注釈を含む）を通して与えたルターの影響は絶大であり、今日風に言えば一種のメディアとして作用したと言ってよいであろう。宗教的内容を含むがゆえに人々に与えた効果は計り知れない。よく言われるようにルターはできる限り超地域的なことば使いをするように心がけていたとされる。そうであったため、上部ドイツ語域の人々も低地ドイツ語域の人々もルターの言わんとしていることをよく理解することができた。この努力は正書法、語・形態のレベルに渡るもので、ルターはまたラテン語に依拠したような文構造や官庁語の造語法を安易に採り入れたりすることはしなかった。明晰でわかりやすい文体にするためルターが学んだものは民衆の使っている生きた話し言葉である。シンプルなスタイルでありながら感情を込めるのに適していて、心懸詞（ja, doch, denn, schon など）が多く取り込まれ、さらにメタファー・ことわざ・レトリック等を駆使して生き生きとした描写がなされた。ルター自身、慣用句の収集に取り組んだが、彼のことが自体が逆にいわばことわざのように用いられるようにさえなったのである（Der Geist ist willig, aber das Fleisch ist schwach.）¹⁹。なお、ルターの人間性については、彼を囲んで行われた『卓上語録 Tischreden』等、身近な人に自身の考えを述べ伝えた場面などで表われているケースが多い²⁰。

1 Stedje, Astrid „Deutsche Sprache gestern und heute“ (1994:123-126).

2 この『卓上語録』内で示唆されているのは、エムザーの1527年の新約聖書のことである。『卓上語録』にはこれまで数種類の翻訳が出ているが、本稿では主として上田兼義氏訳（2003年、教文館）のものによることにする。

- 3 すでに古高ドイツ語の時期から部分訳ならばいくつか見られる。
- 4 印刷に付された最初のドイツ語訳聖書は、1466 年の Johannes Mentel (Straßburg) によるものである。メンテル訳：新訳聖書「第一コリント」13, 9-12 を記せば以下の通りである。9 Wann wir erkennen vom tail / vnd weyssagen vom tail. 10 Wann so das kumpt das do ist durnechtig / so wirt veruppigt das daz do ist vom tail. 11 Do ich was ein lutzler / ich rett als ein lutzler / Wann do ich wart gemacht ein man / ich veruppiget die ding die do waren des lutzeln. 12 Wann nu sehen wir durch den spiegel in bedeckung / wann denn von anlutz zu anlutz.
- 5 Schmidt, Wilhelm „Geschichte der deutschen Sprache“ (*2000:227-228) 『ドイツ語の歴史』(朝日出版社)。
- 6 Stedje (²1994:123)
- 7 Schmidt (*2000:233)
- 8 Schmidt (*2000:230-234)
- 9 ルター以前に 14 種の高地ドイツ語の聖書全訳が、また 4 種の低地ドイツ語の聖書全訳が出されていた。その他にも部分訳が数多く出回っていた。ただし、これらはいずれもラテン語のヴルガータ訳聖書を底本にしたものである。
- 10 Schmidt (*2000:231)
- 11 ドイツで最初の製紙工場ができたのは 1389 年（ニュルンベルク）のことである。
- 12 Stedje (²1994:121-123)
- 13 Stedje (²1994:126-129)
- 14 この点についてラテン語の影響がどのようなものであったは解明されていない (Stedje (²1994::139)。
- 15 ドイツで初の外来語辞典 Teutscher Dictionarius は 1571 年に出ている (Stedje ²1994:132)。
- 16 地名・人名などの固有名詞には古い表記が残っていることがよくある。
- 17 今日のドイツ語でも Kreuz, Schutz, Skizze のように統一性があるとは言えない。
- 18 y の用法についても一言触れれば、初期新高ドイツ語期には [i] の音価を表わしていたが (例: yhm 'ihm', feyren 'feiern')、今日では [y] の音価を表わす。

- 19 ルターの語彙力は言うまでもないが、特に神秘主義（Mystik）からの影響によって生まれた語（gottselig, kleingläubig, Sündenangst, Feuereifer, Herzenslust）の数は少なくない（Stedje ²1994:125-126）。
- 20 「ルターは歴史とその人生の中に神の行いを見て […] 彼の発言の直接性は卓上語録の本質的な魅力を形成している」（『卓上語録』解説、393 頁）。